



Title	若槻哲雄氏の五十年
Author(s)	
Citation	大阪大学史紀要. 1987, 4, p. 123-136
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/6886">https://hdl.handle.net/11094/6886</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 若槻哲雄氏の五十年

出席者 若 槻 哲 雄（元 総 長）  
 芝 哲 夫（理学部教授、五十一年史編集委員会委員長）  
 熊 谷 信 昭（工 学 部 教 授）  
 山 田 朝 治（工 学 部 長）  
 梅 溪 升（文学部教授、五十年史編集委員長）  
 （司会） 梅 溪 升（文学部教授、五十年史編集委員長）  
 （阪大五十九年二月二十日 大阪大学事務局名誉教授室にて）

### 一 第二次大戦前後の原子核研究のこと

梅 溪 本日若槻先生にわざわざお出ましいだいたいのは、大阪大学の古い経緯についてお話をしていたいたり、また、先生の総長時代のご経験、つまり一貫教育と教養部改革、その他寮問題についてもお伺いしようと思いますので、よろしくお願ひいたします。

はじめに、先生ご退官のときに「阪大とともに歩んだ四十六年」という研究のお仕事の詳しいご報告をさせていただきます。その中に、終戦直後にアメリカ軍が来まして、実験装置が破壊されましたことについてかかれておられます、そのころのことからお話しただけますか。

若 槻 阪大のサイクロトンは昭和十一年からつくり始めて、二年ぐらいでもう働いていたんですよ。それからコッククロフトワルトンは、

わりに小さな装置ですけれど、最高電圧が六十万ボルトという、それでも建物の二階までぶっ通しの大きな部屋をつくって、中性子の研究は、それを使ってやってました。それから昭和十五年からバンデグラーフという加速器をつくり始めてね、それは私がつくったんですよ。それと、サイクロトロンがあったわけです。戦後そこへアメリカ軍が来て、原子核の研究をやってるところには番兵がずっと剣付鉄砲でついて、入れなくなっちゃったんですよ。そしてサイクロトロンは破壊されました。サイクロトロンだけなんですよ、破壊されたのは。高電圧装置は大したものじゃないと思って、向うはなんにもしなかったんです。それから理化学研究所（理研）に阪大のよりちょっと小さいのと、大きいのと二つのサイクロトロンがあり、二つとも阪大のと同じようにつぶして捨てられたんです。理研は、戦後そのままもう何もなくなっちゃったわけですね。それから京大はサイクロトロンはまだつくりかけで銅線とかだけあつたそうです。そして、コッククロフトワルトンがやつぱりありまして、それを使って戦後何か始めました。それから東大も二〇〇万ボルトぐらい出すバンデグラーフ加速器を持つてまして、それも壊されないで済んだわけです。

梅 溪 戦後の阪大以外の全国的な状況はどうなんですか。

若 槻 何しろバンデグラーフ加速器というのは、みんなまだ未完成だったわけですよ。それでも初めは原子核に関する研究は全部禁止になつたわけです。そのうちにちょっと緩くなりましたが、しかし、じょつちゅう状況を報告しろというんです。どういう研究をやつとつて、どういう状態かということはGHQに報告せえと。そのためには、

をつくりまして、各大学から委員がでまして仁科芳雄さんが委員長になりました。何しろどもみんな、研究費も物資も欠乏しているので、ろくろく成果もでないわけですよ。それでお互いに話し合う機会をもつ、そんな組織ができました。そのときローレンスが来るというので、みんな東京に集まりました。菊池正士先生は、日本におつたら何でもきないからといって、アメリカへ行ってしまって、私が留守を守つたわけですが、それで私が行きました、そこでローレンスを囲んで話をしました。仁科先生が亡くなつたあと、朝永振一郎さんがその委員会の委員長になつました。朝永さんが口火を切つて、「日本でも小さいサイクロトロンぐらいほしい」と言いましたら、ローレンスが同情して、「そのぐらいのもんいいじやないか」と言ってくれたんですよ。それまではGHQの係官が来てまして、日本にはぜいたくだとか、食糧の研究でもやれとか言つてたんです。

梅溪 GHQには科学局とかいうのがありましたが、ローレンスは

それの責任者として来てたんですね。

若槻 そうではなくて、ローレンスは昭和二十六年にちょっとだけ来ました。そして、亀山直人さんが学術会議の会長でした。それでローレンスが帰つてから、それじや何とかしようということになつたんですね。それからいろいろ議論をして、これが結局、のちに「原子核特別委員会」という名前の委員会になりましたが、原子核や原子力のことは当分そこで議論をしました。そこで、サイクロトロンの再建について検討しましたが、結局、阪大が実績があるし、経験のある人もおるからというので、文部省の予算が阪大につきました。理研は文部

省管轄でないものですから、通産省の前の段階で何かやつぱり役所がありました。そつちの方から金が出まして、サイクロトロンをつくつたんですよ。それが日本の原子核が復興する一番初めの話なんですね。

熊谷 若槻先生、話は全く飛ぶんですけどね、先生は本学の理学部の第一回の卒業生でいらっしゃいますね。理学部に本部がございましたでしよう。あれは理学部のどの辺にあつたんですか。

若槻 理学部の玄関を上がって、そのすぐ上の階の真ん中のところ、玄関の真上のところですね。後に理学部長室になつたところが総長室ですね。それから一階の、後で理学部の事務室になつた辺に、本部の事務がいました。そのあと本部はだんだん大きくなつてきたもんだから、狭くなりまして、理学部の蓄電池室の屋根の上に木を組んで小屋みたいのをつくつて、そこにも本部が入つてましたよ。

山田 総長室が理学部から替わったのは今村荒男総長の時代でしたかね。

若槻 そうでしょうね。正田建次郎総長のときには、すでに理学部ではなかつたですね。

芝 ところがね、楠本長三郎総長の時代に一時総長室がいまの、いわゆる新館という、病院へ移つている時期があるんですね。

若槻 ああ、そうですか。

芝 だからどの程度本当に毎日総長が、理学部の総長室を使つておられたか。今村総長の時代も、先生どうですかね。

若槻 大体、総長なんてあんまり仕事なかつたみたいですね、昔は（笑）。

熊谷 私も聞きましたよ。昔の東大総長の話ですが、卒業式の告辭と入学式の祝辞を一年間かけて考えることが、東大総長の主要な仕事だつたと言つて、(笑)。

芝 先生、湯川秀樹先生が中間子理論を考えつかれたのは、あれはやっぱり阪大へ来てからそういう発想をされたのですか。

若槻 阪大でです。

芝 それは間違いないです。阪大で部屋はどこだったんでしょう。

若槻 部屋はね、私よく知ってるんですよ。私の部屋の真向かいだつたからね。物理の棟の真ん中に廊下があつて両側に部屋があるんですけどね、左側が居室で、右側が実験室でした。

芝 左側というのは、南側ですね。

若槻 ええ、南側。で、一番奥に部屋がありましてね、小さい部屋が。そこには山口太三郎という先生がおられて、その手前のところが湯川さんの部屋です。坂田昌一さんが助手で、湯川さんが講師だったのかな。

芝 それは、二階ですか。

若槻 地階の上だから、一階ですよ。その向かいの部屋が実験室ですね、そこを机で半分に仕切りまして手前の方が食堂兼会議室になつてました。それでその奥のところで私が実験しておつた。

芝 塩見研究所は全然湯川さんは使つておられなかつたですか。

若槻 それはね、理学部の建物ができる前には、行かれたことはあるのかもしれないけれどもね。塩見は狭いですからね。それに八木秀次先生や浅田常三郎先生やらが使つておられたから、そんなにいろん

な人が部屋をもらうだけの余地がもうなかつたと思ひますよ。だから、時折塩見に行つたというだけじゃないですか。

芝 その程度ですか。

若槻 はい。

芝 それじゃやっぱりあの発想が浮かばれたのは、あの理学部の部屋であると思つていいわけですね。

若槻 理学部の部屋だと思いますよ。昭和十年でしたね、私たちが三年になったときに、もう物理学会へ入れと先生に言われて入会しました。そのころは物理学会の会誌に寄稿するのには、必ず発表しなきやいかんというんです。ところが、年会なんかじゃとても間に合わないでしょう。で、毎月か、一ヶ月置きか忘れましたけどね、物理学会大阪支部というのをつくつて、講演をやっていました。そこで、湯川さんがしおりちゅう何か発表してましたよ。何か黒板の方を向いて小さな声でボソボソ言うとるんですよ。それがいまの話のはじめなんです。菊池先生なんかはもうコッククロフトが働きだしてからすぐ実験などをしてられたからね。ぼくら学生でんまりよくわからんけれども、何しろ毎回行つては聞いたのですよ。それから学生三人で相談してね、湯川先生何だかボソボソ言うとるけど、あれ一体何言つてるのか、いっぺん聞かしてもらおうじゃないかといつて、湯川さんを引っ張ってきてね、お話を聞いたことがある。そしたら、そのころは実験的にも認められていないし、はなはだ自信がないような調子でね、何かちょっとだけ話しててくれました。

芝 いや、私の先生の小竹無二雄先生がね、湯川先生がノーベル賞

をもらわれた後で言われたことなんですかけれども、湯川先生が阪大の理学部に博士論文を出されましてね。小竹先生は、化学の方ですから、物理のことはわからんけれども、いかにも心配でね、横に菊池先生が座つておられたので、「菊池君、あれほんとに大丈夫かね」と言つたんだっておっしゃつていました（笑）。

若槻 いろんな話ありますよ。そのころはね、伏見康治さんはもう才氣煥発で、いまでもそうだけどね、やつぱり何か発表したり、それからこれというのがあると、すぐ何でもかんでも手を挙げちゃ、何か質問していた。しかし、湯川先生は黙つているわけですよ。おとなしい先生でね。それで、八木先生が誰かがね、「君、もうちょっと勉強して伏見さんのようになりたまえ」と言うたことがあるという話なんですよ（笑）。それはね、八木先生ならそういうこと言いますわ。何でも言うんです。浅田先生がスペクトルメーターか何か、もう少し上等なやつを買ってもらおうと思って、八木先生に頼みに行つたらね。

## 二 大学紛争と寮問題

「君が——何とかいうよその大学の有名な分光学の先生ですよ——何とか君ぐらい偉かつたら買ってやるけれども、君じゃだめだ」と、言われたといつてね、浅田先生はそれを、「おれはこんなことを言われたよ」と、学生の前でまたそれを得々と言うんだよ（笑）。「ひどいな」なんて言つてね（笑）。八木先生という先生は、本当に思つたことをずけずけと何でも言う先生でね。私も言われたことがあるんですよ。卒業が間近になつたときに、八木先生が来いと言われたから、教授室にいきましたら、「飛行機会社で物理の卒業生がほしいという話がある。君、行かんか」と、まあ、そこへ行ってたら兵隊いかんです

んだかもわからんのだけれどもね（笑）。私は、「いや、私はもうちょっと大学へ残つて勉強したい」と、言うたんですよ。そしたら「残るつて言つたって、生活のことだつてあるだろ」と、言われたから、「どうもまだもうちょっと勉強したいから勉強して、それから高等學校か、高等工業か何かの先生の口でもあつたら行きたい」と、こう言つたんですよ。そしたらね、「君、そんなこと言つたって、どこだつてみんなポストはふさがつとるんだから、だれか死ぬのを待つのかな」って、こう言われるんですよ（笑）。早々にして逃げて帰りました（笑）。

熊谷 八木先生にひどいことというか、厳しいことを言われてこたえたという人、たくさんいますね。

若槻 そうでしょう。偉い先生だけれどね。

梅溪 若槻先生のご経歴を拝見いたしましたと、ちょうど大学紛争の頃から評議員、理学部長、それから総長になられたわけですが、先生がいろいろご苦労されたことは、私たちの記憶が新たなんですけれども、少し紛争について先生のお感じになられたことなど、お話を頂きたいのですが。

若槻 私はね、本当は申しわけないだけれども、戦後は実験室にこもりつきりでしてね、大学の行政的なことはほとんどやらなかつたんですよ。だから、紛争の少し前ぐらい、昭和四十一年頃からですね、岡田實先生が総長の頃に評議員になりましたけれど、はじめは紛争の

ことはよくわからなかつた。しかし、だんだん大学の様子がおかしくなつてきて、理学部の中でもいろんな学生が騒いだりするもんですから。五人委員会というのを昭和四十四年頃つくりましてね。

梅溪 理学部の中ですか。

若槻 理学部の中で、それは二階の塙見研究室にいつでも交代で詰めておつて、何かあつたらすぐ対処するような体制をつくつてた。そのころからですね、私が何か少し関係してくるようになつたのは、その前には中川正澄さんなんかが評議員で、随分いろいろあつちこつち集まつては相談をされたりしてましたね。そのころ教授会なんかでも大分議論がありまして、何しるあのころは何とか平穏におさめたいという一念だつたですし、東大で加藤総長が運動場か何か広いところで何かやつたと、うような話もあつたので、こちらもやっぱりやらないと、これはどうにもならんのじやないのかといふのでね。だけど、

評議会は何だかなかなかそこまでがむずかしい。岡田総長もどうもまだはつきりしないらしいし、これはいつべん岡田総長のところへ行つて、ひとつ頑張つてやつもらつたらどうかと、進言した方がいいんじゃないかといふような議論になつてね、そのとき私は、もう評議員になつてたのかな。それで理学部長と、結局二、三人でね、岡田総長の池田のお宅まで行つたことがありますよ。

芝 それですか。昭和四十四年の一月に運動場で一度岡田総長を迎えて集会をやりましたね。

若槻 そうです。ところがそれも変なことになつてしまつましてね。結局、岡田総長を守つて自動車に乗せんならんことになつて、一生懸

命人垣をつくつた覚えがあります。それから昭和四十四年の五月頃でしたかね、中之島の講堂で民学同と團交をやられて岡田総長がダウンされたのは。この頃から総長代行が動き出してくるわけですよ。

梅溪 当時の瀧川春雄学生部長はもう始めから、ああいう理不尽なものには絶対出んと言つたんですね。まあ、それももつともなことで、何かそんな雰囲気がありましたね。

若槻ええ、そうです。それにやつぱりね、ある程度はやるだけはやってみて、その上でまた考え方よう、できるだけ宥和的にやってみようという、そういう気分でしたよ。

芝 理学部の教授会も一度、理学部の五階の大講義室へ先生方全員連れていかれて、いわゆる大衆團交というのが夜中まで続いたことがありましたね。

若槻 ありましたね。ひどいもんでしたよ、あのときは。しかし、実際は連中が、やつてくる少し前に情報が入つたんですよ。それでどこかへ逃げてやろうかと言う意見もあつたのですが、「逃げたら、いつまでも逃げまわらないといかんから、もう逃げんで頑張ろう」と私が言うたんです。そしたら、みんな「そうだ、そうだ」言うてね。

芝 覚悟でおやりになつてたんですね。

若槻 みんなも来るのを覚悟でおつたんですよ。そしたらやつてきて「大衆團交をやれ」と言うでしょう。それに「いやだ」と言つた。「これは、教授会だから出ていけ」と言つた。そしたらね、向こうは何しろ四、五十人学生がみんなヘルメットをかぶつて、棒を持つとるんですよ。そして教授一人を二人づつくらいで、両脇をこう持つてね、

引きずっていきよるんですよ。広田鋼藏さんだったかな、こうやって寝てしまふたんですよ。そしたら担がれていった(笑)。それでね、みんなそういうレジスタンスしながら上まで行つたんですよ。そして、皆を教壇に並べてね、「何か言え」と言うわけですよ。そのときは緒方惟一さんが部長の代理をしとつたんですね。

芝 ああ、そうでしたか。村橋俊介先生はおられませんでしたね。

若槻 村橋先生はね、何かもう体の調子を崩しちゃつたんですよ、やつぱりあんまりゴタゴタでね。で緒方さんはおつたけど、緒方さんも黙つとるし、だんだん険悪になってきたから、私が立つてね、私五人委員会だから、まあ緒方さんの代わりしてやろうと思ってね。何しろ大勢の教職員や学生がやつてきてながめとるでしょう。みんなは一体何をしとるんだろうと思つて見ているからね。説明せないかんと思って、私が説明したんですよ。「いまわれわれは、こんな所で座つてるけど、これは座りたくて座つてんじやないんだ。この連中がやつてきて、教授会をやつているのを、二、三人づつでここまで引っ張り上げたんだ。こういう不法なことは本当に腹が立つんだ。これが現状だ。こんなんわしは相手にせん」と言うたんですよ。そしたらね、後ろで学生が手をたたいた。

芝 「そうだ、そうだ」と、言うのがいたんですよね。

若槻 そうしたらね、いきなり棒を持ったやつが行つてね、ボカーノと頭殴つてね、殴られた者は頭蓋骨骨折か何かになつて伸びちゃつたんですよ。それから、こりやいかんということで、少し皆さんは手控えたんだけど、私はもう一番初めに言うたもんだから、向うがボカ

ンとしてしもうてね、だから私は殴られんで済んだけどね。それから今度は緒方さんに、「何か言え」いうたら、「おれも同じだ」と言うたんですよ。で、二、三人「右に同じ」と答えたら(笑)、そしたら怒りだしてね、それから今度、「言え、言え」というて、マイクを唇へたたきつけられて、だれか出血したね。杉本健三君かな。

芝 そうでしたかね。

若槻 それから、誰だつたかね、落ちそうで落ちんような、何かフラフラ上手に言うとつたね(笑)。

芝 それは池田重良さんでしよう。

若槻 だけど結局、あんまり相手にしないで、ただ何かしらんしゃべつてるという状況だった。

芝 内山龍雄さんはむしろ相手のやつのマイクをワーッといつて取つて、自分でしゃべり出してね。マイクの取り合いになつた。

若槻 全闘争の連中はね、要するに、いまの大学は悪いから、これを全部分解してしまおのが目的だと言うんですからね。もうこんなやつは相手にできんという腹が決まつちゃつたようなもんですな。皆さんも大体そうだったと思う。

梅溪 阪大の紛争としては、いま若槻先生からお話をあつたような状況から発展したんですけど、学生の処分問題がきつかけでしたね。

熊谷 審問題は少しおエイズが遅れていましたね。

若槻 処分問題ですよ。

山田 あの当時、東大から紛争が始まつて、全国に拡がつていつた。だからまあ、火種が何であつてもよかつたのでしょう。

若槻 そうですね。何でもよかったです。

山田 で、京大は寮が火種になつたんだと思いますよ。阪大の場合

は、寮を火種にする必要はなかつたわけですね。生協の問題の方で、処分問題が出てきて。寮にはいろいろ問題がありましたが、当時の紛争の主流にはなりませんでしたね。

熊谷 そのかわり、最後まで残りましたね。

芝 そういうことですね。

熊谷 若槻先生はいまのお話のように、紛争の一番最初のころから、絶頂の、最も激しいとき、さらに最後まで残った寮問題にいたるまで、常に大学の中枢部におられたわけですけど、いわゆる紛争のほかにも、付随しているいろいろ問題がございましたね。初期のころは生協問題、それから大学改革論とか、いろんな問題があつたわけですけれども、先生は問題としてはやっぱり何が一番大きい問題だったという印象をお持ちですか。たとえば寮問題なんていうのは、一番大変な問題だったというような印象をお持ちですか。

若槻 いやー、そんなんじやないと思ひますね。

熊谷 寮問題も一つの問題という程度で……。

若槻 寮問題は本当に大学の学生全部を動かすほどの力はないと思ひますね。多数の学生がね、いろんなセクトに動かされるというような状態があつたことが問題なんですね。いまの処分問題なんかも、処分されちゃつてからもう半年以上たつてからの話ですよ。そんなものいまさら言うのは時効なんですよ、本当は。それをやっぱりあえて持つてくると、それがそれで火種になるんですからね。なるよう

な素地があつたということが、本当は一番大きな問題だったと思いますね。

熊谷 寮固有の問題は紛争の直接のテーマとしては、どっちかといふと次元の低い問題なんですね。しかし、寮というのが、ほかの大学の場合もそうでしたけども、そういう過激派学生の拠点になるわけですね。しかも、過激派学生だけの拠点というのなら、まだ扱い方もあるんですけどもね、もう普通に入った、いわゆる正規寮生の生活の場でもあるもんだから、扱いが非常にむずかしかったですね、最後まで。

若槻 そうですね。

芝 だから、紛争が終わって静まつていけばいくほど、それだけが浮き上がってきましたわけですね。

若槻 ええ、ええ。

山田 結局、最後の拠点でしたからね。生活の拠点と学生運動の拠点としてね。

山田 私が学生部長の頃、つまり昭和四十五年頃はいましたが、紛争状態ではなかつた。しかし、宮山寮の光熱費一律徴収や、途中入寮自由というような問題点がいろいろあつたわけです。従来からの慣例というか、彼等の既得権を主張していたわけですね。

若槻 途中入寮の問題などいろいろあつたね。

山田 それはいろいろありましたが、昭和四十六年、四十七年ぐらいいから矛盾点をかつちり改めようとして、バーッと火がついたわけなんですよ。それから、釜洞醇太郎総長の終り頃にはかなり激しくなつ

たところをそのまま若槻先生が引き継がれた。ですから先生も大変だったわけですね。私たちのように直接責任者でないものは、時々応援にゆくんですが、その頃の一般の先生方は「紛争も済んでおさまつたるのに、まだ何をガタガタやつとるんか」と、こう言うわけですね。生活委員の先生だけがしんどいわけです。

熊谷 だから、若槻先生のころなんかは、さっきの全国的な大学紛争のときとちょっと様子が違って、学内対策というのが非常にむずかしかったと思うんですね。いま山田先生のおっしゃったような雰囲気がありますしね。ですから、私たちが生活委員の頃はね、元学生部長とか、旧生活委員などをして苦労された先生方に相談役をお願いしてましたよ。顧問団みたいなものです。

若槻 顧問団がおつたんですね。それでね、随分そういう方々のご意見は聞きました。それから、もう少し違った立場で考えられる人の意見も一遍聞いてみようというのでね、たとえば新しく本学へ来られたような先生に、一休客観的に見てどういう感じがするだろうかといふような話は聞いたことはあるけれども、これはまあ大体想像するような答えしか、やっぱり返ってこないしね、もうこの辺で妥協は一切投げ捨ててやるしかしょうがないと思いましたね。しかし、その前に先生方によく知つておいてもらわないと、いわゆる紛争もすんで、平和ムードになつているというバックグラウンドがありましたからね。私はそれが一番気になつてたんですよ。いくら理屈が通つていても、学内から突つかれたりしたら、どうしようもないですからね。だから、総長名で学内向けに、しょっちゅう告示を出しました。これは筋の通

つたことをやつてんだということを、半分はPRで、それから、後はいよいよ最後は法律的な手段に訴えたときの、やっぱりそれがどうでも要るというようなこともありますしね。それに学生が本当に前非を悔いてのつてくれればそれに越したことはないというんで、そういうものばっかり出してましたね（笑）。ある期間は。

山田 結局、長い時間をかけたということですね。

若槻 そうです。そうです。

梅溪 また、それが必要だつたですね。

熊谷 時間をかけないとダメでしたね。

山田 結局、入寮募集停止に踏み切つたのが、あれ、いつだつたですかね。

芝 それは昭和五十一年で、先生が総長のときでしたね。

山田 入寮募集停止に踏み切つて、それをずっとと統けてきたわけですね。

熊谷 最後までそれで頑張り通したのが、やっぱり大きな決め手ですね。

芝 それがなかつたらできませんよ、途中入寮の問題もありましたからね。

熊谷 途中入寮は昔からフリー・バスみたいな格好で入れてましたからね。訴訟でも、一番のウイークポイントはこの点だつたんですよ。

若槻 それから、法学部の先生は、医者で言えば基礎だから、臨床の先生にも意見を聞かないかんと、法学部の出身で弁護士をやっている先生に相談にのつてもらつたりね、随分やつたんですよ。

熊谷 本当に歴代のご苦労の蓄積が実っています。

芝 本当にそうだと思いますね。

熊谷 若槻先生が総長になられたころ、私は学生生活委員をしていましたが、まだ若氣の至りというか、血氣盛んといいますかね、先生に「総長、紛争とか、戦争をこわがっていたら、筋は通せませんからね、少々の紛争なんかぼくらが引受けますから、やっぱり筋を通したいかんと、こらもう具合悪いですよ」と、申しあげたんですよ。そ

したら先生が、「そら、そう言つてもらうのはありがたいけれど、大學というのは、喧嘩や戦争をするのが本来の場所でもないからね。」と言われたのを覚えてるんですよ(笑)。総長ということになられるど、やっぱり大変なんだなあということを、そのときに思つたんですね。総長にあんなこと言つたの悪かったと思つてますよ(笑)。

若槻 それはタイミングということがあるんですね。それで新規寮はわりに留年する学生が少ないから正規寮生のいなくなる時期が早く来まして、だからこれをどうでもやらないかんというのでね。山本明さんが学生部長として、よくやってくれまして、あのときは本当にフル回転したんですよ(笑)。

熊谷 あれで本当に成功のパターンが最初にできましたね。

芝 でも、若槻先生、あのときもいろいろ大変でしたね。

若槻 法律問題にも苦労しました。法務省に通つてもなかなかうまくいかないんですよ。

法律というのは、わりあいに当り前のようなことでも、なかなか「うん」と言つてくれない。

芝 やつてしまふと、後からは助けてくれるんですけども、やる前は助けてくれないもんだから(笑)。

若槻 それから斎藤寛治郎事務局長ね、あの人にも事務的にはずいぶん世話になりました。それから、ワーキング・グループも大変苦労されましたな。

芝 そうですね。

熊谷 ワーキング・グループは釜洞総長のときにできましたかね。

若槻 そうです。そうです。

山田 この名称は紛争のときにつけられたんですよ。工学部もとうとう昭和四十四年七月に原子力工学科の建物が封鎖されましてね。で、

そのだいぶ前から吹田徳雄先生が、評議員だけやつたら具合悪いということで、工学部にワーキング・グループというのをつくられたんですね。八月になって釜洞先生が総長になられたとき、「ええ言葉があるな」ということでワーキング・グループをつくられました。当時はね、総長補佐とか、具体的な名前をつけますとね、その人たちの権限がどうのこうのとか、やっぱり角が立つたと思います。その点、英語で言うとね、分かつたような分からんような、じまかすのに都合がよい(笑)。

芝 しかし、もう定着してしまったですね。

山田 定着したんです。このじまかすのもうワーキング・グループとい

うのは軽いと言って、「総長補佐役」言うんでしょう。そうですね。

若槻 東大もそうでしたね。

熊谷 東大では、正式名称ですね、総長補佐というのは。

梅溪 しかし、吹田先生で、よう確認書書かはつたでしょう。

山田 いや、一遍だけなんですよ。しかし、徹夜団交になりましたからね。一通だけではなかつたかも知れませんが。

梅溪 学生と大衆団交して、確認書というのが、はやりましたでしょ。

若槻 ありましたね。

山田 吹田先生のときは東野田でやつたんですがね。はじめは、真面目に対応しなければいかんということで、予備折衝もやり、二時間の話し合いということで学部長、評議員、それから教室主任が参加、

私も精密工学科の主任として参加しました。ところが、ヘルメット集団によつて徹夜団交をやられたわけです。向こうもヘリクツを言うんですよ。予備折衝のときは工学部長だったが、今日は総長代行を相手だと。何かあの頃、集団で代行制になつとつたんですね、総長は。

若槻 岡田先生がダウソされた、その後ですね、総長代行に山本巖さんがなられてからだつたかね。それで、工学部は吹田さんが、中之島地区は伴忠康さんが、それから豊中地区は伊藤さんかな、伊藤順吉さんが総長の代わりをするんです。何かそういうふうになつたことがありますね。

山田 とにかく、異常な雰囲気で真面目に話ができるような相手ではないですからね。頑張つてダウソするのにはばからしい。どうせ無効なんだから、確認書は。

熊谷 全部無効だから、何でも書いてしまえというね。

梅溪 そうだつたんでしょうね。

山田 本当はわれわれ主任も書かざることだったんです。しかし、

「学部長一人で十分、ほかは書くな、書くな。」と言つて頑張りました。そしたら連中にね、「そうやな、お前みたいな雑魚は書かんでもええわ。」とやられました（笑）。ほくらも書いとつたら、吹田先生の風当たりがもうちょっと弱かつたかもわからんのですが、「工学部の主任二十人そろうて全部書きよつた。」と（笑）。とにかく、吹田先生には悪いことをしたなと思っています。

芝 紛争を契機にして、われわれ教官の方も徐々に変わつてしましましたね。

若槻 はじめは真面目にやつていた。

芝 はじめは真面目にやつて、だんだん要領よくなつてきて、しかもいろんな各学部の考えもよくわかつてきだし、はじめはバラバラといふ感じでしたものね。

熊谷 これを契機に、学部を超えての教官の一休感というようなものができた、あれは副産物ですね。

芝 紛争のおかげかもしだ（笑）。本当にそうですな。

### 三 一貫教育、教養部問題

梅溪 つぎに大学改革、一貫教育について、先生にもいろいろ苦労頗つたんですが、なかなかむつかしくて強力な改革はなかつたんですけど、そのときの問題点というか、それに対する先生のお考えなど拝聴できましたら、と思うんですけれども。

若槢 これはね、一貫教育という線はもう金洞醇太郎総長のときに

扇谷尚さんなんかが中心になってまとめられましたね。それはまあ皆さん賛成をされたわけですが、それで専門科目を少し下におろすとかということはやられた。だけど何かまだ非常に不十分であるというところで、あと具体的にどういうふうにやることができるだろうかというので、学部長に集まつていただいて相談したと思うのです。私が少し考えましたのはね、カリキュラムの方はともかく、学生の指導の面で、教官一人当たりの学生数というのを、いろいろ表なんかをつくつてみますとね、やっぱりなんといつても教養部が非常に手薄でした。だからもうちょっと学部からも応援してもらうのがいいんじゃないかというふうなことで、いろいろ議論したんですけどね。そうすると結局どこで責任を持つかというようなことが問題でね。それから教養部の時期をもつと縮めたらいいんじゃないかというのを、大分ディスカッションをしてもらつたんですがね。結局総論は賛成だけれども、各論は反対というのが多くてね。私はいっそ教養部を一年位にしてしまつたらどうかという、少し極端な議論をしたんですがね。カリキュラムは別にして、そういうことを学部長にはいろいろお願ひもしてみたことはありますけれども。

梅溪 そうですね、一年教養部案というのは、若槻先生の案ですね。若槻 ただ結局、それはいまのところ理学部で一年半というのが実行されただけです。

梅溪 工学部はもう前から、かなり古くから一年半ですね。

芝 先生のご在任のときに、ちょうど言語文化部がスタートいたしましたね。

若槻 言語文化部がスタートしたとき、私は言語文化部の充実のために、できるだけ努力するから、今までの語学教育というか、とにかく実績を十分つくつてもらいたいとお願いしました。

梅溪 なかなかいい建物ができましたね。

芝 場所もいいしね。日本全国で言語文化部というのは最初でござりますね。

若槻 そうですね。後から真似するのもできましたけどね。文部省も教養部の改革というのは、関心がありました。言文も、はじめは広島大学の方式というのと、それから学部に分属したらどうかという案があつたのですが、私はあんまり賛成しなかつたんですよ。とにかく言語文化部を充実するのと、それから体育関係をやって、それから大学院の担当の問題を解決したいと思つていました。そしたら兼担講座というのが東大で認められたというので、教養部長と相談して、その線ですすめることになつたんです。兼担講座ができるようになつたのは、私が総長として最後の年の頃からですね。

芝 先生の時代からもうスタートしてたんですね。

若槻 そうですよ。

芝 もう一つ、若槻先生のときにできたものとしては、国際交流会館がありますね。これも先生のときでございましたね。

若槻 ええ。

芝 いまは本当に役に立つていますが、もう狭くなつてしまいまし  
た。次はもうひとつ広いのが必要なんです。あれも大学から申請した  
わけですね。

梅溪 そうですね、一年教養部案というのは、若槻先生の案ですね。  
若槻 ただ結局、それはいまのところ理学部で一年半というのが  
実行されただけです。

梅溪 工学部はもう前から、かなり古くから一年半ですね。

芝 先生のご在任のときに、ちょうど言語文化部がスタートいたし  
ましたね。

若槻　ええ。それはそうですよ。

梅溪　神戸もちょっと関係あるんですね。

芝　そう、そう。神戸、京都の関係はどうだったんですか。阪大だけのものではないという……。

若槻　いや。阪大が初めに、留学生を泊めるところがないから何とかせいと言つたんです。それがちょうどタイミングがよくて、文部省の方も非常にそういう気分でしてね。事務次官の木田宏さんが非常に熱心に話に乗つてくれましてね。それで「案が小さいじゃないか、もつと大きくせえ」言うて、次官みずからね。それから「夫婦者も来るだろうから、子供の遊び場もつくってやれ」とかね、いろんなことを言つてくれたんですよ。それでこつちは大喜びでホイホイそれにのつたんですがね。それで実際につくるときには、国際電話の問題とか、食事の問題とか、いろいろ調査をしましたよ。

#### 四 共通一次入試スタート

梅溪　それから先生、例の大学入試センターにご関係になりましたね、国立大学協会（国大協）から。

若槻　ええ。

梅溪　私はごくしょっぱなに共通第一次学力試験（共通一次）をつくりに行きましたがね。あれは文部省は非常に熱心だったんですが、いわゆる旧帝大でも非常に積極的だったんでしようかね。いまの問題は別として、滑り出しは。

若槻　いや、そんなに熱心ではないところが多かったですね。阪大

だつてそんなに熱心だったわけじゃない。ただ、いまの入試はいろいろ批判されますけどもね、共通一次前にはもつと非難されていました。つまり、難問、奇問が多くていかんというんですね。阪大はそれでもないのですが、教養部がない単科大学では問題を出せる先生があまりおらんわけですよ。それで、難問、奇問をどうしても出すと。それで実施までに七年かかったんですね。

入学試験のことは国大協の第二常置委員会の管轄なんですよ。私の前任の釜洞醇太郎総長が第二常置委員会だったので、私も第二常置委員会委員になつて、それで一回か、二回会議やつたぐらいで、前の委員長が定年でおやめになつたので、私が委員長になつた。入試の改善というのは、これはもう大問題だからというので、第二常置委員会だけではなしに、入試改善のための特別委員会をつくりましたね。それで副会長の京大の総長がその委員長になつて、第二常置の委員長は副委員長になつた。それで特別委員会の下に専門委員会がありましたが、しかし、私が総長になつたときは、もうかなり大詰めのところに行つていたんですね。東京工大か何かが最後まで言つっていましたけれどもあえて反対しないというようなことを言つてね、それで結局、総会で決りました。それから今度は文部省で入試センターをつくらなきゃいけんというので、その折衝にも行きましたよ。センター長は加藤さんでしたね。入試センターもできて、もうこれで軌道に乗つたからといふので、後は第二常置委員会に任せとるということになつて、もとの委員会は解散したのです。それからは国大協側は私が責任者になつたんです。それで入試の時期を決めるとか、私立大学に入つてもらうとか、



事務局名誉教授室での座談会風景

やっぱりいろいろ問題ありました。いまは私立大学は何かといつてゐるけど、私立大学にも交渉に行つたことあるんですよ。加藤さんと私ですね。早稲田の総長のところに話しに行つたけれども、全然もう話にならんかったです。

芝 いまでも第二常置委員会でディスカッションは続いてるんですか、共通一次のこととは。

若槻 ええ。だからいま、文部省からなんか科目減らせとかいうて、いろんなことを言つてるでしょう。減らしてね、それで、その科目ど

うでも自分の学部で要ると思ったら、二次試験でやればいいんですよ。ただ、高等学校の圧力があるんですよ、ものすごく。共通一次

で落とされたら、その科目は高等学校で勉強せんというんですよ。

梅溪 ええ、しなくなりますね。

若槻 それでね、要するに難問、奇問を排する、それから共通的に一般科目はいい問題を使うというだけであれば、共通一次の問題だけ使つて、それから二次試験

も一緒に試験をするというのが一つの案ですね。もうコンピューターはどこにだつてあるんだから、

センターで何もまとめてやらなくたつていいしね。

芝 事実上それに近づいてきているわけですね。

若槻 そう、そう。そうすれば試験の期日も遅らせられるんですよ。そのかわり、二度受けるチャンスをつくるためにそれこそ二次募集みたいなことをやるようになりますとか、それから試験期日に少し自由度を与えるとかね、何かそんなことをするというようなことも一つのやりかたですわね。もう一遍昔に戻すようだけど、その方がいい学生が来るといって、府立大学なんかそろやつてますよね。

芝 共通一次もこれで相当長い経験があつたんだから、そのいいところだけ取つて、悪いところを捨てるという改革ですね。

## 五 環境整備

梅溪 阪大も昭和五十六年に五十周年を迎えて、創立五十周年記念事業募金も大体済んでいろいろ事業計画が考えられていますね。何かこういうものが阪大としていいんじゃないかというような、先生のお考えがありましたら最後にお話し願います。

若槢 そうですね、運動施設はもうかなり、吹田キャンパスを整備してできるわけですね。私はね、あんまりお金が要らん話だからね、木をいっぱい植えたらいいと思うんだけど。だんだん大きくなりますからね。

山田 環境整備ですね。

若槢 小さい木でもね、木をもうちょっと植えないよ。

梅溪 枯れる方も多い、皆に努力していただいて、少しは植えて

いくようにしていますが、ほかの大学に比べれば、確かに少ないですね。

若槻　ええ、本当に。私は豊中キャンパスで経験があるんですけど、

文部省から緑化のための予算というのを少しくれまして、それで何べんか木を植えたことあるんですね、土が悪いんですね。

芝　そうですね、この辺はね。

若槻　ちよつとも大きくならないし、それから枯れちゃう。

芝　吹田も豊中も両方とも粘土ですからね。

若槻　私は理学部のサイクロotronの周りにね、何べんも予算もらつては桜を植えたりしたんですが、みんな枯れちゃうんですね。それで、同じ予算なら少し木を減らして、その分よい土を入れたんですね。それでクスノキだったけれども、それがよくついて、サイクロotronの南側、いまは大きくなってるでしょう。あれね、ぼくの背ぐらいのやつを植えたんですよ。それがある段階になると、急にバーッと大きくなりました。

芝　あの西側の松も、先生、こっちのバンデグラフのところですが。

若槻　あれは初めっからわりによくついていたんですね。

芝　よく大きくなっていますね。

若槻　松は松くい虫にやられますからね、あんなもの植えたって、もう大きくなつてからでもやられますからね。クスノキか何か小さい木でも……、あれはわりに大きくなりますね。それで、ここ（吹田）と向こう（豊中）とずうつと大体土質が同じでしきう。

芝　そうです、そうです。

若槻　あんな木を少し植えたらいいと思うんだけど。

梅溪　吹田も豊中も大分ましになりましたけれど、工学部はまだ少ないですね。

山田　ええ、どんどん植えていってるんですけどね。その上、維持するための予算も必要ですね。やっぱり生き物ですからね、環境整備しようと思うと手入れがいるんですね。

若槻　それは人件費を払つてやるんじやなくとも、何かそういうことが好きな人を、部局ごとぐらいで責任者を決めるぐらいの意気込みがあれば、できるんじゃないですかね。

芝　いまは大高の森と浪高の庭で両方とも木が多いんですけども、桜などは徐々に植え足していくないとよくないと思います。

梅溪　若槻先生、本当に長いことお話しいただきましてありがとうございました。